

退職のごあいさつ

定年退職をされた方々のうち、次の方々から、ごあいさつの言葉をお寄せいただきました。長年にわたり本学の発展にご尽力いただき、本当にありがとうございました。これからも益々お元気で活躍されることをお祈り申し上げます。

なお、定年で退職された方の中には、引き続き本学に勤務される方もいらっしゃいますが、無事退職を迎えられてのお気持ちなどをお寄せいただきました。



草莽の医師

医学部内科学講座（内分泌代謝学部門）教授 石橋 俊 さん

2001年から、自治医大での医師兼教師兼管理職という価値あるお仕事を、多くの方々に助けられながら、無事了えることができたことを、ここに改めて感謝申し上げます。天気が良ければ祇園の職員住宅から下野薬師寺か弦巻公園まで朝ランし、週1回は閉店間際のかましんで食材を買い出し、夜の会合がなければ自炊、週末は東京の自宅という一週間の繰り返しに、学会関係の出張が時折挟まるという生活でした。

この間の最大の出来事は、カンファランス室のロッカーに入れてあったパソコンの紛失事件でした。厚労省関連の臨床研究の個人情報が入っていたため、下野新聞にも報道され、施錠の怠慢を厳重注意されました。教育者とし

ての無力感に囚われたり、リクルートや研究費取得の強迫観念からはなかなか自由になれず、急性期病院での慢性疾患の診療という矛盾に肩身の狭い思いがありましたが、それ以外は総じて平穏な日々を送らせていただきました。

先日、教育研究棟講堂で「最終講義」させていただきました。録画が図書館から公開されておりますので、ご興味のある方はご覧ください。その中で、「好きな言葉」の一つとして「草莽の志士」を挙げさせていただきました。明治維新に限らず、見返りを求めず、現場で義に挺身する若者によって時代は動いてきました。医療現場を支える「草莽の医師」が自治医大からこれからも巣立つことを祈念して、退任の挨拶とさせていただきます。

学内広報 第478号 2023年4月10日



2023年3月1日最終講義、教育研究棟講堂

オフロードで耳を澄ます

いしばし糖尿病内分泌内科クリニック院長
自治医科大学名誉教授

石橋俊氏 (1982卒)

過去を振り返ると私は

実にラッキーだったと言わざるを得ない。戦のない世に生まれ、勉強に集中できる環境に育ち、授業料の安い自由な学校(国立)で勉強し、人気職業である医者と研究者と教育者を経験し、大きな健康不安はなく、尊敬できる師や友人、そして楽しい家庭にも恵まれた。30歳代前半の留学先ではトップサイエンティストたちの薫陶を受け、40歳代前半から最近まで「医療の谷間に灯をともし」使命感に燃える若者と過ごした。さらに言えば、脱サラを果たし、定年の節目に鉄門だよりに寄稿の機会をいただい

た。

後輩の参考までに学生時代を振り返りたい。授業出席の熱心度は中くらいで、いつでも抜け出せるように後方に座り、試験前には友人のノートのお世話になった。記憶に残る鬼気迫る名講義を三つあげるとすると、本庶佑、大橋靖雄、野々村禎昭の三先生かな?お二人は鬼籍に入られたが。日本語の教科書や試験対策本は買わないと意固地になっていた。Harrison's Internal Medicine 原書の読破、N Engl J Med の case records of the MGH の抄読と ECFMG 合格を目指した。時間の大半は勉強以



▲ 1992年8月 UT Southwestern 留学中のパーティーでのスナップ。左、筆者、中央、Joachim Herz 先生、右、Michael Brown 先生。

外に費やしていたにも関わらず、一度も追試を受けたことがない。牧歌的時代でもあり、要領もよかったのだろう。

鉄門陸上部に加え鉄門山岳部に所属した。往年の名ランナー瀬古利彦の走りを横目に織田フィードルや駒場のグラウンド

などで練習した。合宿は検見川寮だった。短距離200mでは東医体の銀メダルまで到達し、連続続きたった新潟戦では主将を務めたM3のときに優勝できた。

山岳部の合宿や個人山行では、根津の赤札堂で買い出しをして、兎小屋

で荷造りし、中央線や上越線の夜行列車の床に敷いた新聞紙の上で寝て目的地を目指した。薬品類の荷上げと診療補助の名目で毎年二回は穂高の涸沢診療所を往復した。秋休みに劔岳から奥穂高岳に抜けたソロ山行が達成感という意味で印象深

い。リーダーを務めた山行で仲間の一人が雪面を滑落した。幸い岩に衝突して止まったため、遭難事件に至らずに済んだ。二度ほど自分も墜落したが、運良く骨折しなかった。ヒヤリハットだらけで思い出すだけに冷や汗が出る。

東京大学学生基督教青年会（東大YMCA）寮で、吉野作造・森有正・木下順二などを親しく感じて過ごした。日曜日には中渋谷教会で佐古純一郎の説教を聞いた。その関係で参加したボランテニア活動では、障害という過酷な運命を背負った子どもたちが健気に明るく生きているのに接し、つまらないことに悩んでいる自分の卑小さを

知った。

卒後は二年の研修後、東大病院第三内科で六年、UTSouthwesternで四年、東大病院に戻って七年、自治医大で22年、教員生活を送った。研究には「eureka」気分を味わう醍醐味があり、世界中に友人ができる。

結果や評価は二の次でいい。ジョーブルダーノやグレゴール・メンデルを持ち出すまでもなく、真に革新的な発見は同時代には理解されないこともある。7

月の学会で「忘れえぬひと―私の動脈硬化研究史を遡る」と題して半生を総括してみた。仕事以外では、日本百名山を還暦前に完登し、洞爺湖・バンクーバー・ホルルマランなどの旅ランも楽しんだ。単身赴任の夜長に好きな読書に耽った。

この度は、晴れて高齢者となったので、50年近く在籍したアカデミアを離れ、埼玉県北部の地域医療に身を投じた。ちょっととした冒険である。平日は多忙だが、週末にはジムで汗を流し、ときにライブコンサートや山に出かける。老害と

言われるまで（もう言われていくかも）、もうひと頑張りしたい。稲穂を渡る風、小鳥の囀り、蛙や虫の声、そして、声なき声に耳を澄ましながら。（誰かをあげると誰かをあげないことになるため、謝辞は割愛で勘弁願いたい）



▲ 2019年7月Herz先生訪日時に富士山山頂でのスナップ。左、筆者、右、Herz先生。栃木の自治医大で講演してもらい、京都の学会に参加し、山中湖のホテルで天候を伺い、梅雨の切れ目に、富士宮口から登頂し、須走口に下山した。箱根経由で成田に戻った。

開院のご挨拶—祖父の回想など

いしばし糖尿病内分泌内科クリニック

石橋 俊

本年(2023年)2月13日に市内の下手子林に糖尿病と内分泌専門のクリニックを開院させていただきました。9ヶ月経過した今をヒトの成長に例えるなら、つかまり立ちに挑戦しているといったところでしょうか?これもひとえに医師会の皆様のお力添えのおかげです。この場をお借りして御礼申し上げます。

開院前に北埼玉医師会さんにご挨拶に伺った際、私の名前が出ていると言って見せていただいた過去の医師会名簿に、没年にあたる82歳の父方祖父の紹介文があり、その家族欄の孫の項に「俊(12)」とありました。ちなみに祖父の趣味は「読書・花卉・園芸」とあります。そこで、ご挨拶代わりに、祖父の思い出と開院の動機とを文章にしてみたいと思います。

没後54年も経つので、流石に祖父を知る人は少なからうと思っていましたが、60歳代以上の患者さんから、祖父に「診てもらった」、「自転車で往診する姿を見かけた」、「手子林小学校の校医をしていたのを知っている」、などのお言葉をいただきました。人の出入りが激しく、平均年齢の若い東京のような都会では想像できないことです。

私の出生地は羽生市下手子林ですが、父の仕事の都合で小学校卒業までは東北地方を転々としていました。下手子林にある父の実家にはお盆に年1回帰省する程度で、私の祖父との交流も帰省時だけにほぼ限定されていました(写真1)。その実家に隣接する「石橋医院」で、大正

2年11月から没年の昭和44年8月まで56年間も祖父は働いていたことになります。祖父晩年に私は小学生で、実家の風呂が五右衛門風呂だったこと、大きな

銀杏の木の下にある井戸でスイカを冷やしていたこと、柿の木の葉っぱ裏に潜んでいた毛虫に触れて額が腫れ上がったこと、近隣に住む従兄弟たちと遊ぶのが楽しかったことなどが思い出されます。

祖父の診療風景を一度だけ目撃(見学)したことがあります。私から見ればお兄さん(恐らく小学高学年)の子供が2人で診療所にやってきました。一人の足の裏にパツクリと大きな切創がありました。田圃の中を裸足で歩いて、落ちていたガラス片で怪我したようでした。祖父は煮沸消毒した針糸で淡々と切創を縫合していました。当時の祖父は80歳を超えていたと思います。

私が小学6年生の時、祖父急逝の訃報が当時福島市に住んでいた私どもに届きました。夜行列車だったのか、小山駅に向かう東北線の列車の車両連結部の暗がりには座るお尻が痛かったのが思い出されます。実家から寺に向かう葬列の中で遺影を運ぶ係を孫の私が仰せつかりました。享年82歳でした。

9年前に父も他界し、下手子林の土地家屋の

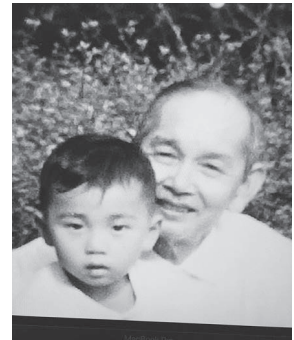


写真1:祖父(推定72歳)と幼年期の私(推定2歳)(8ミリフィルムから)

管理が私の仕事になりました。毎年春になると孟宗竹の竹林の筍から始まり、敷地に雑草が繁茂し始めます。月1～2回、草刈りのために下手子林に通う生活が始まりました。刈れども刈れども猛々しく伸びる雑草に加え、夏は暑熱や蜂の襲撃との戦いになります。この作業を一体いつまで続けるのか？という不満が溜まってきた時期と、私の前職の自治医科大学の定年が近づいていた時期とが重なりました。

脱サラに憧れもありましたので、「石橋医院」の跡地に新たにクリニックを作り、開業医としてスタートし直すことを思いつきました。人生百年時代を反映して、大学教授の定年退職後に、新規開業する先生も私の知る限り5人を降りません。その多くは都会のビル診です。一方、当地は市街化調整区域で、駅からは遠く、下水道もありません。前任地に近い場所や市街地に地の利があるという意見もありました。しかし、「石橋医院」の跡地という条件を外したら、敢えて私が開業する必然性がないと感じました。埼玉県は人口当たりの医師数が最も少なく、糖尿病・内分泌代謝内科の専門医も少ないので、私にもお役に立てる余地が残されているのではないか？と思われました。最後に私の背中を押してくれたのは、妻と元教室員たちでした。

クリニックの建築に先立つ旧家屋解体の際に(写真2)、「石橋医院」の診療所部分に保存され



写真2：解体前の旧「石橋医院」診察室外観

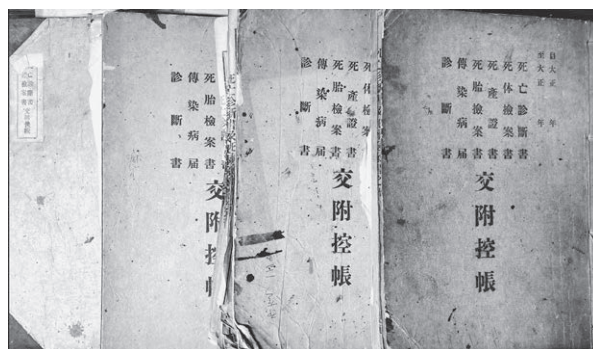


写真3：4冊の死亡診断書等交附控帳

ていた聴診器・顕微鏡・注射器・メスやピンセット・天秤・医薬品を整理しました。診療録・帳簿に加えて、死亡診断書・死体検案書等の交附控帳(大正10年5月から昭和30年4月)も残されていました(写真3)。そこには氏名・住所・生年月日・死亡年月日・死因の記載がありました。判読可能で欠損データのない2,107件のデータをexcelに転記してみました。解析結果の詳細は別稿に譲るとして、そこから以下のような当時の風景が見えてきました。

乳幼児死亡が過半数、若い女性は妊娠・出産関連死が多い、「胃腸加答児」・結核・肺炎・「気管支加答児」・ジフテリア・百日咳・麻疹・腸チブス・破傷風・赤痢・ワイル氏病などの感染症死が多い(驚くべきことに、この傾向は大正から昭和にかけてほとんど変わりません)、悪性腫瘍では胃癌・肝癌・子宮癌が多い、事故死には溺死と(鉄道)轢死が多い、自殺には縊死と農薬中毒が多い。半身不随・脳出血・脳梗塞などの脳血管障害や心臓弁膜症・心不全・狭心症・突然死などの心臓死も多いですが、剖検されてはいないはずですから、診断名の正確な確定は困難です。105歳男性が最長寿です。生年は自己申告でしょうし、誤記であれば、98歳女性が最長寿となり、後者が妥当な気がします。元来、行政用の記録ですから、科学的な検証には耐えないかもしれません。

同日記載の死亡診断書3件という日も少なからずあり、診療活動と並行してお看取りや死体

検案もしていたとすると、文字通り寸暇なく仕事に明け暮れる日々だったのではないかと想像されます。「夜中に雨戸をどんどん叩かれて起こされる生活には自分は耐えられないから、開業医になりたくなかった」という父の言葉が思い出されます。現在では、専門のクリニックが近隣にもあり、重症患者は地域の中核病院などに紹介できますが、当時は、埼玉県では小川赤十字病院や大宮赤十字病院が開設したかしくなかつたので、消防署の救急車搬送のシステムも未整備だったはずで

す。専門医制度や医師会などの再教育制度も未整備な状況で、どのように医学の進歩にキャッチアップしていたのでしょうか？亡伯父から亡父に宛てた「(祖父が)老いたので早く医院を手伝って欲しい」という内容の書簡が多数残されている事実から類推するに、高齢による体力の衰え以外に、医療機器の整備や医学知識のキャッチアップにも遅れがあったのは想像に難くありません。その当時、地域中核病院のICUを任されながら脳神経外科の専門医を志向していた若き父には、総合医が前提の「石橋医院」の承継は受け入れ難かったかもしれません。祖父が死亡・廃業するまでの14年間の交附控帳が欠落しているのは、紛失した可能性以外に、当該業務を近隣の若手医師に委ねたためかもしれません。言い換えると、68歳前後までは死体検案を引き受けていたことになります。

さて、当地に住んでみると、今まで知らなかった多くのことに気付かされます。空が広く、夜が暗く、星や月がきれいというのが第一です。第二は、稲穂や道端の草花の美しさです。第三は路傍の石仏の多さです。利根川に南接する当地は武州になります。武州の山よりも赤城山・皇海山・男体山などの上州・野州の山々が迫って見えるというのも驚きでした。

今年前半のNHK朝ドラ「らんまん」の主人公

のモデルの牧野富太郎が日本にも自生しているのを発見したとされる「ムジナモ」は、日本では羽生市の宝蔵寺沼にしか現在は自生していない(写真4)、剣道着の藍染シェアは羽生市が日本一、鰻屋さんが多く、うどんも美味しい、という発見もありました。東北自動車道の羽生PA上りの小江戸が人気なのは知っていましたが、イオンモール羽生やカインズモールなど新しい商業施設も人気で、羽生市の新しい中心になりつつあるという認識も新たにしました。

大学病院勤務時代は、多種多様な仕事を処理する必要上、一人一人の患者さんに向かい合う時間が犠牲になっていました。大学病院を退任後は教育・研究・管理・学会活動などの業務が大幅に縮小された結果、患者さんにじっくり向き合いことができるようになりました。また、専門外領域も勉強してみようという気持ちのゆとりができました。一方、勉強が追いつかないことに関しては、大学に在籍する若手の支援も得やすい立場はメリットと感じています。

これからはばらばら、祖父も眺めていたであろう同じ景色を眺めながら、羽生市医師会の皆様とともに近隣住民の健康と福祉の向上に尽力する所存ですので、ご支援のほどよろしくお願いたします。



写真4：7月22日に羽生市産業文化ホールで開催された「ムジナモ講演会」の看板